

一列王記下5章・14-17、2ティモテ2章・8-13、ルカ17章・11-19—

イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた。ある村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」と言った。イエスは重い皮膚病を患っている人たちを見て、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた。その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。そこで、イエスは言われた。「清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかに、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。」それから、イエスはその人に言われた。「立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」 —ルカ17章—

信仰の道

赤ちゃんは王様！
泣き声は王様が発する
「号令」！ その一声で
家来たちが動いてくれる
から。

これは、小さい者の叫びには意味があることを示した論ですが、信仰者の中に、大きくなっても王様のままで居る人がいます。不幸を顧みてくれなかったと言って神様を恨み続けている人です。このような人に、イエスは、**広場に座って他の者にこう呼びかけている子供たちに似ていると警えておられます。**『笛を吹いたのに踊ってくれなかった。葬式の歌を歌ったのに悲しんでくれなかった』(マタイ11:16、17)と。

神は何でもお出来になる方です。これを信じるなら、たとえ願ったことが叶えられなかったとしても信仰者は、その現実が私に必要であることを教えておられる神の心が戴けたと感謝するでしょう。「神様、この現実を感謝します。この現実のゆえにあなたを賛美します」と。

信仰とは、神を尊び、そのみ心に絶対的に従う事だからです。救いに至る信仰心に大切なことは、私の望みが叶えられることではなくて、神のみ心が実現することです。神の望みは私たちの救いだからです。

神は人の滅びを望まれる方ではありませんから、私たちが救いを得るために必要なら、私に災いと見えることも、時に神は、私に起こることを許されるのです。私が救いに到達するために必要だからです。

主イエスは、今日も私たちに幸せになる福音を提供してられます。信



じたら信じた通りになる「救いに至る信仰」の恵みです。

神が私に望んでくださるものは何でも良いものであり、感謝すべきものなのです。あの、癒されて戻ってきたサマリア人は、たとえ癒されなかったとしてもその現実を感謝するために、主のもとに帰って来たに違いありません！ 信じたことで、『救いに至る信仰』を戴いたからです。

2022年10月9日
主任司祭 昌川信雄